

# 公共住宅セミナーの開催

「団地再編」持続的な集住環境へー新たな生活像と風景ー

団地再編 COMPETITION2013 を通して、住宅ストックのあり方を考える

KS  
SDP 関西大学  
戦略的研究基盤  
団地再編  
リーフレット  
Re-DANCHI leaflet-

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業  
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

FEBRUARY 2015 VOL. 160



団地再編 COMPETITION2013 展覧会



団地再編 COMPETITION2013 展覧会



団地再編 COMPETITION2013 シンポジウム



団地再編 COMPETITION2013 シンポジウム

## はじめに

団地再編 COMPETITION2013( 関連リーフレット vol.157) の一環として、2014年7月16日と17日に「団地再編 COMPETITION2013 シンポジウム & 展覧会」が大阪市内において開催された(写真:扉)。本リーフレットは、このうち7月17日に開催された「公共住宅セミナー(主催:大阪ガス株式会社、協力:KSDP 団地再編プロジェクト)」の記録である。

本シンポジウムは、公的住宅事業者等を対象とし、団地再編 COMPETITION2013 の受賞者による講演および、審査員等によるパネルディスカッションを通して、今後の

表1. 発表作品一覧

発表作品	作品タイトル	提案者
最優秀賞	自然と都市が近い奥河内エコ・ライフ拠点	重村力
河内長野市長賞	暮らしの誇りと絆が見える<南花台>!!	三好庸隆
優秀賞	ダンチモリー 2052年、団地が還る未来	塚本文
団地再編プロジェクト案	40m <sup>2</sup> の専用庭のある団地	団地再編プロジェクト

住宅ストックのあり方について議論を深めることを目的として、開催されたものである。市町村、公社等事業者などから合わせて217名の参加があった。

団地再編 COMPETITION2013 受賞作品と団地再編プロジェクトによる再編案が、それぞれ代表者によって講演され(表1)、それを受けてコンペ審査員(表2)によるパネルディスカッションが開催された。

パネルディスカッションでは、UR

表2. ファシリテーター、パネリスト

氏名	所属
江川直樹	関西大学
鳴海邦碩	関西大学
岡絵理子	関西大学
星田逸郎	(株)星田逸郎空間都市研究所
安原秀	OLAの会
三谷幸司	三谷都市建築設計室
重村力	神奈川大学
三好庸隆	武庫川女子大学

南花台団地をはじめとした公的集合住宅団地の、今後の地域における役割について活発な議論がなされた。

## 1. コンペ受賞者他による講演

### 1-1. 自然と都市が近い 奥河内 エコ・ライフ拠点 (発表: 重村力 写真 1)

豊かな自然環境の中に南花台団地がある。どうやって活発に活動する団地にするかが私たちの提案である。

河内長野市が進める奥河内の考えが良い。緑豊かで、歴史も文化もある居住地として捉え、エコライフやロハスなど新しいライフスタイルを築こうとしている。生活とは、生活を築くことであり、ここではそれができつつある。新しいファミリーが入り、まちづくりの拠点になる可能性がある。

南花台では 25% の住戸が空き家であり、40% の駐車場が空いている。空いた空間と資源を活かす再編を提案した。第一に住棟間の空地を、外部に接する街路型の構成に転換する。第二に、商店などにより、にぎわいの空間となっている沿道が、団地で途切れており、それを連担させ、にぎわいの連続を作る。第三に、6 つに分かれる街区それぞれに、特徴を持たせた外部空間と施設を導入する。またこれら事業の原資をつくるため一部の事業化も提案している。

空き家は最上階や妻側、接地階に多い。断熱やプライバシーがデメリットとなっているが、改善し固有性のある住戸に作り替えることで、多様性を創出する。

街区ごとの外部空間に特徴を持たせ、例えば菜園を作るゾーンでは、様々なアクティビティがみられるようになる。関連施設がつくられ、周辺からも人が集まる。大阪の都心ではできないことで、奥河内だからできる。ペットが飼えるゾーンでは、ドックランなどの施設を入れる。高齢化対策のゾーンでは、グループホームやデイケア施設を入れる。子育て応援ゾーンでは母親アドバイスなど、親子の安心のための施設を入れる。

沿道の築山には、奥河内にふさわしいオーガニックカフェや手作り工



写真 1. 発表者: 重村力

房、菜園レストランを入れる。夜の街区を明るくし、安心面も向上する。

中心部には、南花台と周辺戸建て住宅地に対応する広場とする。住民らの交流の場とし、奥河内ライフスタイルを実践する拠点とする。高齢者と若年層が定住し、また若年層が周辺に住む親族とのネットワークを築くなど、持続的な定住の拠点とする。

団地再編では、団地が生活提案の拠点となることを考えるべきである。

### 1-2. 暮らしの誇りと絆が見える<南花台>!! (発表: 三好庸隆 写真 2)

私は、団地再生は生活圏の再生としてとらえるべきだと考えている。戸建て住宅地を含めた生活圏の再編をどうすればよいかを、全国のケーススタディとして、東洋医学的に解いたのが、私の提案である。

人口減少によって総需要が減る中、郊外団地が限られた需要にどう選択されるかが深刻な課題である。

南花台では、戸建て住宅地、UR 団地の特性を相互に生かし、より開かれた生活圏を再生する必要がある。

本提案では、生活圏、ライフスタイルのイメージを「暮らしの誇りと絆がみえる南花台ー奥河内スタイル満喫の近郊外生活ー」とした。奥河内スタイルとは、豊かな自然を生かした暮らしを行う近郊外のライフスタイルで、ここで都会ではできない絆が見える団地を目指した。

私は提案の骨子として、以下の 5 大コンセプトを提案した。

① UR 団地を地区全体の commons ペース、広場とする。動線を再編し、



写真 2. 発表者: 三好庸隆

人が集まる場所にする。集会所を個性化し、図書館やギャラリー、カフェとし、次世代型の空間に作り替える。

②地区センターは、拡大した南花台センターを形成し、さまざまな使い方ができる空間とする。

③住棟の一部を除却し、ビジネスの場とする。例えば有料老人ホームを導入、活性化の拠点とし、地域に向けた活動を展開する。例えばデリバリーサービスや、訪問介護、配食サービスなどである。

④住棟はリフォームする。エレベーター停止階や低層階はサービス付高齢者住宅などとし、高層階は子育て世帯などの若者向け住戸とする。

⑤マネジメント組織をつくり、フォーラムなどの開催を通して、人材の発掘を行ったり、世代間で問題共有したりする。住民が、いつのまにか全部自分で考えたかのように感じられる仕組みをプロセスの中に入れると、住民の誇りが生まれる。たとえば、2020 年のオリンピックに合わせ、南花台のフォーラムを企画し、実現に向けて取り組むことを提案する。

### 1-3. 「ダンチモリー 2052 年、団地が還る未来ー」

南花台は、現状のライフスタイルや生活の多様性に対応しておらず、専用共用が分断され住民の交流が妨げられていることや、屋外空間が単調で生物の多様性に乏しいことなどが課題である。バリアフリーの観点からも問題がある。

今後は、居住者が減少し家賃収入が減少、維持管理が困難になり、また税収も減少して都市サービスが悪



写真3. ファシリテーター:江川直樹

化することも予想される。

南花台の地形を手掛かりにして再編の方向性を考え、以下の3つの「モリ」を提案する。

居住者による主体的な団地運営の仕組みを創る「守」、共有空間の再編によって多様な活動の場を創出する「森」、住む以外の機能を導入し、住の充実を図る「盛」である。

「守」では、団地に住み、働く団地レンジャーをつくる。団地レンジャーは住棟住戸を借り上げ、カフェ等を運営し活動費を捻出する。住民の暮らしに能動的に関わり、コミュニケーションや活動をサポートし、助け合いが循環する仕組みをつくる。

「森」では、共用部にケアハウスなどを導入し、半専用、半公共空間として開放し、マーケットの導入も図る。建築と屋外の一体化や、住民が利用できる屋外空間の拡大を図る。さらに周辺の斜面地等、自然環境との一体化を目指す。

「盛」では、住棟内にマーケット、ケアハウス、カフェなど住以外の機能を導入し、住の充実を図る。団地の暮らしを豊かにし、暮らしを継続し、また異なる機能同士が触発しあって、新たな活動を生む。

これより主体的、生産的、創造的に暮らす団地として再編されるといえるのが私たちの提案である。

#### 1-4. 40m<sup>2</sup>の専用庭のある団地(発表: 芦田康太郎)

団地再編プロジェクトでは、40m<sup>2</sup>の専用庭がある団地を提案する。南花台は都心へアクセスがよく、豊かな自然が周囲にある。敷地内には緑



写真4. パネリスト:岡絵理子

地、駐車場など広い屋外スペースがある。都心では得られない豊かな自然のある健康的な郊外居住を行うライフスタイルを提案した。

屋外スペースを専用庭として、一戸当たり約40m<sup>2</sup>を分配する。生活が屋外に拡張され、耕作、バーベキュー、キャンプなど多様な生活風景を作り出す。住民による自主管理が実現し、団地から持続可能なまちへと転換する。

公道を通して、住棟を接道させ、住棟ごとの改修を可能にし、一団地をまちのスケールに近づける。緑道を東西に通し、周辺住民に開放された動線、空間とする。道路沿いの敷地は売却し、店舗や併用住宅、戸建て住宅を導入し、まちなみの連続性を確保する。得られた資金は住戸、住棟の改修整備に充てる。

住棟の一階を改修し、集会施設やカフェ、高齢者施設など、まちの機能を導入する。住棟間にはピロティやデッキ等によりつながりを作る。住民自らが改修することができる仕組みをつくる。専用庭があることで、多様な風景と南花台ならではの暮らしを作ることが私たちの提案である。

#### 2. パネルディスカッション

ファシリテーター:江川直樹(写真3)

今回のコンペでは、地域、団地敷地、住棟・住戸、デザイン、マネジメントなどに対して、様々な課題が抽出され、提案があった。地域における公的賃貸住宅の意味、役割を考えながら、再編の方向性を議論したい。

パネリスト:岡絵理子(写真4)



写真5. パネリスト:三谷幸司

団地の再編では、すべての団地がそれぞれ方向性を見つけて変わらないといけない。システムの転換とか、UR、地方公共団体の覚悟とか、オープンスペースの位置付けとかを考え直し、これからの態度を決める必要がある。本コンペがきっかけになるとよい。

三好氏の案では、住民マネジメント組織が提案されているが、住民とは地域の居住者か、それとも市民を指すのか。市民を相手にしたマネジメント組織だろうか。

また、団地の敷地は誰のものかを位置づけることが大事である。多くの案では、住棟を沿道型にしたり、一部を一戸建て住宅地としたり、それぞれ敷地に違う意味を持たせている。敷地全体を、誰がマネジメントして、誰が使うのかも方針を決めている必要がある。

ファシリテーター:江川直樹

三好氏には後程、マネジメント組織について、説明をお願いします。

パネリスト:三谷幸司(写真5)

提案のそれぞれに素晴らしい案があった。住民、河内長野市、URは、自分が扱える部分を集めて、再構築することが大事である。南花台は近畿圏のフリンジに位置し、同じ問題を抱える自治体は多く、その視点からのアイデアがたくさんあった。

コンペで大事にしたことは、場所性と、時代性である。場所性でいうと、南花台と同様の場所はたくさんあり、南花台という場所性をきっちり考えないといけない。入賞した3案とも、この場所性をとらえた案だった。

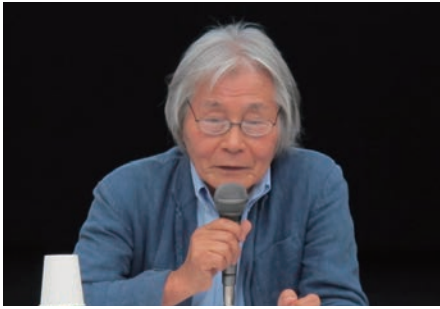


写真6. パネリスト:安原秀

時代性でいうと、固定された団地に対する時代の流れを読むことが大事である。流れには2つあって、必要とされる都市サービスの変化といった生活のなかで動くもの。もう一つは将来を見据えた流れで、たとえば人口減少である。これらは一般的な対応では難しい。

居住形態も多様化しており、シェアハウスなどが提案された。住宅以外の機能の導入も考える必要がある。畑とか森林とかも、周辺の環境と合わせて見ていくことも必要である。

これからの計画は、常に時代を見ながら修正していかないといけない。  
パネリスト:安原秀(写真6)

第一に、住民の自立意識の視点ということを考えたい。ある映画のシーンでしたが、一人の男性がアパートの2階の一室から玄関を出て階段を下り、緩やかな道を歩いていく。

彼の表情には専門家の作ったよい空間に身を置く満足の表情があふれていた。この満足意識をもてることが、環境を考える場面での住民の自立なのではないか。自立とか協働とかを言葉から大袈裟に考えると大変だが、いい空間を通して、肉体からそれを感じるという見方をすると分かりやすい。専門家の提案が一人一人の心に語りかけ、互いを結びつける作用を果たす意味を大事にしたい。

第二に、コンペではシェアをする考え方が多く出された。集合住宅はそもそもシェアから始まるが、シェアの議論はあまり行われなかった。

第三に奥河内という、都市的産業のベース、日常生活と林業や農業が合体した地域主義の確立が重要です。

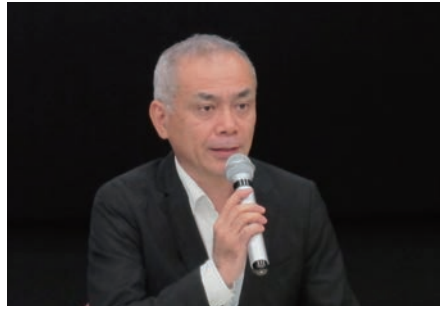


写真7. パネリスト:星田逸郎

消滅可能性1位の地域とされているようだが、逆に好都合で、不利な時はパラダイムチェンジの好機です。

大都市の都心から1時間という好都合を活かしながら、独立に向けたシミュレーションを市と住民で行おう。

パネリスト:星田逸郎(写真7)

このコンペの特徴として、審査基準を設けていないことが特徴であり、審査員が自分の問題意識をぶつけながら、様々な対話をした。

私の判断基準は、一つは、方法の話から実現の話へ力点を移すべきということである。すばらしいアイデアがあって、かつ実現の手立てやプロセスが提示された案を選んだ。

もう一つは、実現のためには本当の危機や問題の所在を発見する必要がある、住まい手や環境と対話しながら、知識や思考も巡らし、複雑な問題を如何に発見・構築しているかが課題であった。これらはアイデアや提案の前段の問題ではあるが、コンペへの意思表示として重要であると思う。

一方、住まい手にも様々な人や考えがあり、「住民意」の編集は大変である。実務の場では、問題が一体どこにあるのかという起点に立たされることが多く、問題の所在をどう実感し背負えるかが大きな問題である。

さらに、もう一つの視点は、空間の形である。今まで半世紀、住棟の形や配列は均質で並行に置かれていた。今その空間構造を、たとえば囲われた空間をどう広場にしていくなのか、あるいは街路沿いの建築によってどう街路空間が構成されるのか。



写真8. パネリスト:鳴海邦碩

重村案のように住棟から増築されたり、生活提案の結果として、出たり引っ込んだりする空間構造を、これからの半世紀にふさわしいようにどう修復するかが重要だと考えている。

また安原氏の言われた日常の風景においては、私は特に幼児と母親がどう過ごすかが重要な問題と考えており、そのような日常の生活空間を作り出すところに言及している案に興味を持った。

ファシリテータ:江川直樹

本当に団地の再編とは何かを考えた提案が多くあり、審査員もさまざまな視点から取り上げた。団地が疲弊していった欧州の例を見ると、多くが空間の形に、コミュニティの問題や、領域性の問題等がリンクしている。そういう視点が重要だと思う。  
パネリスト:鳴海邦碩(写真8)

公的住宅は、政策として作られたが、ストックの政策ははっきりしていない。現状ではただ残ってきたという位置づけしかない。自ら変化しない公的住宅のストックは残余化してしまった。

ストックの政策を確立する必要がある。一つとして、社会をけん引する新たなミッションを与えることである。もう一つはそれぞれの団地固有の条件を生かして団地をまちにすることである。

新たなミッションとして、高齢化社会の基盤づくりをけん引する役割が公的住宅にあると決めれば、できる。東京都心部では、公的住宅に高齢者施設を導入し、高齢化社会の基盤をつくる提案がなされている。

次に団地を「まち」にするにはどうするか。様々な機能を入れる、孤立させない、閉鎖的にしない、自ら変化する団地にするという提案、自主的、自立的、DIY的、またコミュニティビジネスとして団地を運営するなど、様々な提案があった。

実験として、団地にそれを担う組織を指定、認定し、制度・規制緩和して、再編を実施したらよい。さらに政策として実施したらよい。

空間の再編についてみると、立体通り庭のある住まいづくりという案でよかったのは、内部だけでなく、外部の重要性を強調した点である。パーミンガムのエンベロップスキームのように、外部を替えることで団地全体を変える、という政策で成功した事例がある。

ダンチモリの提案では、団地に様々な機能を導入する案だったが、野菜工場や、特産物ビジネスを、作ったらよい。また三好氏の提案にもあった老人ホームから新しいビジネスを展開する案などは、南花台だけでなく、すべての団地で政策的に実施するとよい。

様々な施設を、地域を考えながら、導入していくのが正解だと思う。

私はかつて、兵庫県営住宅に管理人として入居していた。ゴミ管理や、イベント開催、緑化など、私を含む管理人が、住民と一緒に企画し、実施した。当時は若い入居者が多かった。今は高齢者が多いが、自治組織の中に頑張る人もいる。誰かが手を挙げれば、以前のように動き出すのではないかと思う。

自ら変わる団地については、ベトナムのハノイにそういった団地がある。住民にエネルギーがあると自ら変わっていく。1階が商店になったり、ベランダが張り出して部屋になるなど、住宅の枠を破りたいという住民の意識が感じられる。

日本では、同じプランに住民が押し込められているが、変えようとす

るエネルギー、住宅から飛び出したニーズはある。

公営住宅が持つ可能性をどう評価し、今のライフスタイルにどう生かすかが課題である。団地住民が、どこをどうしたいと思っているか、専門家は勉強しないとイケない。

ファシリテータ：江川直樹

審査員の話を受けて、発表者の方にお答えいただきたいと思います。

パネリスト：三好庸隆

マネジメント組織は、既存の自治組織、河内長野市、URが協力して、フォーラムを企画する、団地と戸建て住宅で、何段階かに実施のレベルを分けて、住民が加わっていくフォーラムというものを考えていく。そういった対応が実務的に可能である。

敷地は誰のものかについては、実務的には、たとえば各世帯に専用庭を持たせ、それらが農園になったとき、それが現実的に可能かどうかを考えないとイケない。

私であれば、次世代型のパブリックスペースとし、たとえば花壇を導入する。利用、管理は、技術や経験を有する周辺も含んだ住民がする。団地住民と周辺住民とが融合し、相互に課題を解決していくのがよい。

河内長野市は消滅可能性都市 No1 といわれ、パラダイム転換のために都市のあり方をシミュレートする必要がある。人口減少の確度は高い。重大な事実として受け止める必要がある。

公共賃貸住宅には、税金を投入して、生活サポートや、新しいライフスタイルの提案、新しいライフスタイルのためのビジネスを導入することが可能である。私は、民間企業ではできないシニア層とか、若年夫婦など社会的弱者をターゲットとしてフォローし、そこから裾野を広げていくことが基本的考え方だと思う。

パネリスト：重村力

普通には、無限の普通がある。普通を実現するために、実はカスタマ

イズしなければならない。自らが変化できる団地として、カスタマイズの要求にこたえなければならない。

持続している団地、たとえば、ドイツのジードルング、日本では同潤会アパートなどは、もともと住宅タイプにバラエティがあり、若干のカスタマイズができた。そして団地はさらにバラエティに富んだものになっていった。特殊化したものの集合になっていくが、それが普通であり、持続する。

人口予測はマクロでは正確だが、ミクロにみると政策的な意思が働くため当たらない。私は河内長野市が衰退するとは考えていない。都心から30分に位置し、近くには金剛山系、山を越えると高野山、それらをメリットとするライフスタイルや市民活動とか、様々な文化活動がある。

ゆかたな自然の中で、さまざまな市民活動と触れ合い暮らしたいという人は、河内長野市へどうぞ来てくださいという感じである。

もう一つは、持続する集住という視点から、この団地をみると、入居してくる人には若い世代と、高齢者が特徴的である。高齢者は、持ち家を処分して気軽に住みたいという。しかし、アクセスのよい高齢者向け住戸など、それにふさわしいストックがない。少しずつでもストックを改善すると、団地の定住性が高まる。

一方、元気がある南花台の戸建て住宅地と、ネットワーク居住する可能性がある。子供世帯が戸建て住宅に住み、親世帯が賃貸に転居するか、逆に団地に親世代が住んで、子世代が近居するとかである。こういうことを考えていくと、賃貸住宅は必要なものであることがわかる。

賃貸住宅は地域の中で、住み替えの可能性を担保し、ニーズを吸収できる良さがある。

以前に千里ニュータウンを調査したとき、専用住宅地にはないはずの事業所が10数%程度、混在していた。

つまり住宅地は、そこへ向かっている。団地をカスタマイズし、良好なストックとすることで、まちがよくなっていくのではないか。

ファシリテータ：江川直樹

カスタマイズとか、固有の条件、場所・地域の特性、生活圏、ネットワーク住宅など、公的住宅のミッションにはないものが浮かび上がってきたと思います。

公的賃貸住宅が、地域の中でどのような役割を担うべきかを議論をしないと、再生、再編の目標も見失ってしまいます。

新たなミッションの制度化は難しい課題であるが、実験的に実施する、隙間的に実施することが求められる。最後に公的賃貸住宅の地域における役割について、一言いただきたい。

パネリスト：岡絵理子

一つは、私は団地が集まって住む装置であったとは見ていない。

場所の使い方や、やりたいことが、DIYとか自立的な変化によって、どれくらい表現できるようになるかが大事である。それを可能にするシステムへの転換や、どうマネジメントしていくかが大事である。

もう一つは、公的住宅の話をするときに、UR団地が福祉住宅的になっているという話がある。市民の意識として、UR団地のうち、これは福祉的、これは民間賃貸と同等、といった認識がはっきりしている。民間と戦える団地と、そうではない団地があるということである。南花台は、それを認識しながら考えていく必要がある。公的賃貸住宅では、そこも考えなければならないという問題提起をします。

パネリスト：三谷幸司

持続して住み続ける環境についていうと、小さい単位のものがたくさんあるのは大事である。また団地の中で、自分のライフスタイルに合わせて、自由に住み手が移動できる仕組みを作ることが大事である。

もう一つは、住んでいることの帰属意識、痕跡を住まいの中に残すことが大事である。内部空間でいえば、DIYとか、ハノイのように変わっていくのが良い。専用庭も、自分の足跡を団地内に残すことである。公共、自治体の役割は、変えることを可能にする、仕組み、制度をバックアップすることだと考える。

パネリスト：安原秀

私は、住宅は賃貸住宅が本流でありたいと思っています。

現在はのっぺりとした大規模住棟に建て替ってしまったが、大阪市営の北日東住宅や南日東住宅は、かつては魅力的なまちを作っていた。昭和6～7年に建設された、囲み型、街路型の団地で、アウトローながらさまざまに増改築された表情は住人の住み方欲求がまざまざと表現されていた。こういう公営住宅群がもう一度、出現したらよいのだと思う。

パネリスト：星田逸郎

公的賃貸住宅は本来、あるべき住環境のけん引役であるべきだが、その再生や改革が実際に実現できるかが問われる。どうあるべきか、の話があっても翌日からは実務社会のパラダイムが各々押し掛かってくる訳であり、それを現場で個々が具体的にどう改革していくかが重要である。

その為には、再編を支えるはずの、公共という概念が経済的要素に比べ

て機能していない感がある。絡まってこう着してしまっている再生へのスイッチを作動させる、なんらかの社会的なデザインが必要と感じる。そのためにも、今日のような議論をこれからも続けられたらいいと思う。

パネリスト：鳴海邦碩

かつては賃貸住宅を民間が供給して、スラム化した実態があった。民間賃貸住宅は、居住水準を上げる努力をしない。それができるのは公的賃貸である。よって世界中どこでも公的賃貸住宅は重要な位置付けにある。

公的住宅は主に団地として作られてきた。その方向は変わってよい。ストックを「まち」として活用できないと、損したことになる。ストックを活用して、より環境を良くしていく、生かしていくのが当然である。

もっと楽しく暮らせる公的住宅へと、社会的バックアップがあれば、できる。公的住宅を活用して、まちの中に生かしていくことが最良の選択だと思う。

ファシリテータ：江川直樹

住宅は、生きる活力、満足を与えるものである。公営住宅はセーフティネットといわれるが、それを象徴する場所にしてはならない。公的団地の再編を考えるということは、もう一方の日本の住まいのあり方を考える一つの大きな手立てだと考え、私たちは団地再編に取り組んでいる。

団地再編は、本日のように関心が高く、また難しいテーマであると考えている。今後も議論を展開し、自ら変化するというキーワードを考えていきたい。

(文中敬称略)

関連リーフレット 157 158 159

発行：2015年2月

『公共住宅セミナーの開催

—団地再編コンペティション2013より—』

作成：団地再編プロジェクト室

とりまとめ：保持尚志（関西大学大学院 博士後期課程）

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

関西大学

先端科学技術推進機構 地域再生センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室

Tel : 06-6368-1111 (内線:6720)

URL : <http://ksdp.jimdo.com/>